恋路、龍也の場合

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋路、龍也の場合

【Ｎコード】
Ｎ４１３５Ｄ

【作者名】
黒狐

【あらすじ】
何気なく日常を過ごしていた龍也、彼には幼馴染の女の子がいた。他愛もない生活はこれからも続くはずだったのだが・・・・。

前編

「あ、熱い・・・」

照りつけるような日差しの下。うだるような暑さ、耳に張り付くように響くクマゼミの鳴き声を聞きながら延々と続く坂道を登見上げると、暗澹たる気分が俺の中に湧き上がる。

中学の受験戦争にもみくちゃになりながらも、何とか無難に地元であるここの高校に入学した俺だが、いや誤算。ここに来て最初の後悔は、この高校がやたらと高い山の上に位置していると言うことだった。坂道の上にそびえ立つように建てられている高校、こんな所に学校を建てる様な奴はきっとヒーコラ言いながら登ってくる俺達生徒を見ながら楽しんでいるんだろう。下手ないやがらせよりよっぽど達が悪いな。

ここにきて既に一年以上の時間が経過しているのだが、この坂の辛さは一向に慣れそうもない、しかもこの坂道をあと一年以上も登らなければと思うと暗澹たる気分はさらに倍増する。

登校するだけで汗が体中から染み出している、肌にまとわりつく汗は、下着を一枚余分に着ているようで決していいものではない。

俺の名は比嘉龍也。入学した当時は、それなりにまだ見ぬ高校生活に胸躍らせていたはずなんだが、現実を知ればこのザマだ。中学と何ら変わりない学校生活じゃないか、ただ物理的に学校までの距離が遠くなっただけ。先入観ってのはこわい。

何で俺はこんなところに入学したんだろうね・・・・

ゴールは冷房が効き過ぎていて逆にお腹を壊してしまいそうな、さ

むーい教室ってか・・・・・・

「よう龍也！スラマッパギー」
汗をたらしながら歩く俺の後ろから男子の声が聞こえる。
彼はゆう君。俺と同じクラスのやつなんだが、コイツかなり変りものでな、

「・・・・・・・・・・・・」
朝からうっとうしい、とりあえず無視、こいつは訳のわからんことを永遠と俺に語りかけてくるのだ
「あれ？スラマッパギー素通り？！」

指摘するところそこかよ！？アンタ今無視されたんですよ！？・・・・・ゆう君はどこか抜けている・・・もはや病か。

坂を登り切り靴箱でスリッパに履き替える。
「それでさぁ・・・臭いよねぇって・・・・・・」
もういい！朝から野郎のウキウキトークなんざ聞きたくもない。

教室で朝学習のプリントを受け取り一息つく。二年六組、ここが俺達の学び舎だ。俺のちょうど対角線の反対側では、ゆう君がほかの生徒と話をしている・・・・・・・こころなしか会話が一方通行の様な気がするんだが・・・。

「どうしたの、顔が悪いよ？」
「顔が悪いよ？じゃなくて顔色が悪いよ？だろ！」
聞こえた声に間髪を入れずに突っ込み、顔をあげる。立っていたのは淡い紫色の長髪。彼女の名は九条黎子、クラスの学級委員を務めるヤツだ、と言っても学級委員を決める際に立候補する奴がいなく

て仕方なくその役を買って出てしまった・・・・と言った感じなのだが。

「さすがですー、今日もキレがいいですね～」
清楚な笑みで答える九条、おっとりしている性格なのだが。たまに訳の分らんことを吹っかけてくるのだ
「あ、そうだ」
九条がポケットから何かを取り出す。
「トランプ？」
反射的に眉をしかめながら言う。どうやら占いをしてくれるみたいだ
慣れた手つきでカードをシャッフルする九条、『どっかで見たことあるシチュだな』とかいう奴は帰ってくれ、マジで。
「・・・・あ」
一変して手元を狂わせてしまいカードがバラバラと床に落ちてしまった。
「・・・・出ました」
・・・・・何が？

「今日のあなたの運勢は最悪です、何をしても裏目に出てしまうでしょう」

「ちょ、ちょちょっと待て。あんた今カード撒いちゃっただけじゃん！」
漫画だったら確実に頭にドでかい？マークが浮かぶと所だよな、しかも運勢は最悪、朝の星座占いで十二位になってしまった時よりひどい言われようだぞ。
「・・・これは仕様です」
丁寧語のままの九条、撒いたカードを見下ろしたまま拾う気配がない。

「だって、『あ』って言ったじゃん『あ』って」
「それは呪文です」
「『あ』っていう呪文！？」
浮かんでいるマークが『？』から『！？』に変わったきがする。胸張ってそんなこと言わないでくれ、超不思議キャラよ・・・・・・・
などと言っているうちに、チャイムが教室に響く。すごい複雑な気分を残したまま一時限目の授業が始まり、何事もなかったかのように九条は席に着いた。
こんな感じで今日と言う日が始まる訳だ。平凡そのもの、ゆっくりと時間が流れていくような穏やかな一日の始まり。・・・あの、トランプは片づけないのか？俺の足もとに散らばったままなんだが・・・・

――――昼休み――――
俺は教室を抜け、いつもの場所へ向かった。教室では女子たちの仲好しグループが机をいそいそと動かし、みんなでランチタイムを甲高い笑い声と共に始めていた。俺の机を使うのは勝手だが、後で戻しておいてくれよ。
ここは校舎の屋上、高い山の上に立っているだけあって眺めは悪くない。屋上の一角には少し広めの庇が設けられていて、熱いこの時期でも庇の下は不思議と涼しい。持参した弁当を秒単位でかき込むと、片肘をついて横になる。そんな体背をとるなら当然の如く、心地よい眠気が俺を優しく包み込む。
拒絶することなくやわらかなまどろみに意識を預けると、頭振る間の浅い眠りに落ちていった。

まぁ平凡な男子高校生の一日だろう。無論勉強はしているが、あと他に学校で何かやってると言えば寝てるか何か食ってるだけだろ、部活に入る気もないので運動などと言う健全極まりない行動も俺はしない。

とりあえず放課後。午後の授業は昼寝の続きを無意識のうちにやっていたらしく、気がついたら帰りのホームルームも終わっていた。

学校の帰り、校門の前で一人の女子と目が合う。

「おい、乱こんなとこで何やってんだ。」

「おそいっ！何分待ったと思ってんのよ！」

両手を腰にあてがい背の低めの女子が、金髪ツインテールを揺らしながら口をへの字に曲げていた。

「は？何いきなり言ってんだ。おれは待っててなんて言ってねーぞ！」

こいつは、南城乱。俺の家の近所に住んでいる幼馴染だ。俺は今さっきまで友達とだべっていたのだが・・・

「いままでずっと待っていたのか？俺のことを。」

「ちちち違うわよ！勘違いしないでよねっ！たまたまよ、たまたま。」

さっき遅いだのなんだの言ってたのにか？

よくわからんが・・・・まぁいいや。

乱とはクラスが違っていて学校ではあまり話さない。まぁ小学校の

頃からの縁でこいつとは合わない日は無い位に会ってるから。クラスが違うくらいがちょうどいいかもしれない。

「そ、それで・・・どうなのよ？」
唐突な切り出し方だな、どうって何が
「クラスでよ、なんかあるでしょ・・・・いじめられ・・ゴニョゴニョ・・・・・・」
高二になって今までのクラスがかわり、話す奴が減ってしまったのは確かだが言うほどのものではない、それなりに今までと変わりなく学校生活を送ってるつもりだが・・・・
別になにも・・・・俺の心配してくれんの？

「べ、別にあんたの心配なんか、してないわよっ！」
妙に突っかかるな、聞いてきたのそっちじゃないか。
「うっさいわね！馬鹿タツヤ！」
俺が何か言い返せばすぐこれだ、黙っていればそれなりのカワイ子ちゃんなのにその性格でプラスマイナスゼロじゃん、人間は見た目じゃないね、きっと神様が俺にそう言ってるに違いない。
分ってます神様！世界中のだれよりもこの事実についてよく知っている自信があります。

「そういえばさ～」
何がそう言えばなのか俺には分からない、こいつに正しい日本語を教えてくれる奴はいなかったのか？
乱は上目づかいでないか言いたげな顔をしている、よくない兆候だ。
・・・・・・な、なんだよ。
「少し小腹がすいたわ、あそこのお店で何か奢りなさい」
ほら来た、乱は指の先をとある喫茶店に向けている。

少しは考えてくれ、俺は今金欠なんだ、欲しけりゃ自分で買え。と

言う言葉は外には出さず、胸の内に閉まっておくことにした、言ったところで何が変わる。こいつが言い出したことは例え天変地異が訪れようとも変わりはしないのに。

まったく・・・・・こいつはうまそうに食うねホントに・・・・・
夢中になって山盛りになったパフェを頬張る乱、それを半ばあきらめるように見る俺。
この子はもう少し加減と言うものを覚えたほうがいい、まったく、学生食堂の紙パックジュースがいくつ買える値段だと思ってやがる。って言うかそんなに食ってよく太らないな。ダイエットってのはきっとこいつには無縁の話なんだろうな、だって太らないんだもん。
あと俺の財布も・・・・・

ちゃくちゃくと山を削り取られていくパフェ、もう既にデフォルトから三分の一ぐらいの量になっている。
とてもじゃないが高二の女子には見えない、そこらの中坊にパフェ食わしたらきっとこんな顔になるんだろうな・・・・・
ふと視線を上げた乱と俺の視線がぶつかり合う、
「こ、こっち見ないでよ！」
だーもう、わかったよ。
顔をほんのり赤く染めた乱から、視線を喫茶店の窓から外に移す。
まだ夏は始まったばかり、放課後なのに日は空高く、休む暇なく核融合を繰り返している。誰かあいつに有給休暇をとらせてやれ。

「ただいま〜っと・・・・」
とりあえず今日の授業やらなんやらをこなし無事帰宅、玄関で靴を脱ぎリビングへと向かうと。
「お帰りー」

キッチンから声が聞こえる、俺の姉貴の比嘉ミコト、姉貴はキッチンで今夜の夕食を作っている最中だろう。

姉貴はその真っ白で清楚なロングヘアーを揺らし、顔をこちらに向け、

「で、どうだったよ？久しぶりの学校は？」

「いや、別に久しぶりも何でもないから、なにその夏休み明けの新学期みたいなノリは？」

・・・どうやら俺の周りにはマトモナやつがいないらしい。

俺と姉貴はここの家で二人暮らし・・・・・ではないんだ

親父とお袋は、この近くで旅館を経営していて、いつも忙しいので家にいることは少ないと言うわけ。

窓から外をのぞけばなかなかに立派な旅館、その縁側では忙しなく右往左往する仲居さんの姿。

毎日たくさんの人が泊まりに来るそうだ、実際親父の仕事に興味をもったことはないからよく知らんのだが。

旅館を囲うように生える木々は夏の日差しを受け、煌々とその身を強調し見る者を魅了する。

何とも風情ある景色。俺はリビングから見えるこの風景が結構好きだ。

あ、仲居さんと言うのは旅館などで働く女性従業員のことね。

「あそうだ、今日の晩飯は？」

一応気になる。他にすることもなかっただけで、特に深い意味はない。

「今夜はカニクリーム――――」

「お、やたー」

「ごはんだよ」
「ごはん!?カニクリームごはん!??・・・・」
でも結構いけるかもしれない、と思ったら負けか?

姉貴とのボケ会話もひと段落。俺は二階にある自室へと向かう。
自室はベッドと漫画しか入っていない本棚、壁にはポスターなどの掲示物の類は一切ない
高二の男子、好きなグラビアアイドルのポスターぐらいは貼ってあるものなのだろうが、
しょっちゅう俺の部屋に上がり込んでくる乱に
「なんだこのムッツリエロリー!結局男はおっぱいか!おっぱいなのか!」ってうるさいのだ。
特に好きなグラビアもいないし、貼らないに越したことはないのだが・・・・・

一時間もたたないうちに俺は自室を出ることになる。
まぁ、既に何回も読み返した漫画なんて面白くもなんともないから。
飯の時間までリビングで過ごすことにした。飯の時間てまだ大分先のことなんだが・・・・・・

リビングでは姉貴がテレビ見ながら何か食っていた。
「あんたも食べる?葡萄」
テーブルの上にあるのは皿にのった葡萄、深い紫色で一粒一粒がけっこう大きい。
時期としてはなんか早すぎないか?確か旬は秋頃だろ?
「冷蔵庫の中にもまだあるわよ」
そんなに買ってどないすんねん。

とりあえず俺も一つ、果物の良し悪しは分らんがこうやってまったりするのはいい、ゆったりと時が流れていくようだ・・・・・・人間にはもう少しこういう時間があってもいいんじゃないかと思うんだがね。

・・・・・って乱っ！なんでちゃっかり一緒になって食ってんだ！あまりにも自然過ぎて今まで気付かなかったぞ！

「なによ！別にいいじゃない、私の好物葡萄だって知ってるでしょっ！」

しるかっ！っていうかいつからだ！いつから俺の隣に座っていた！

「ミコト姉さんがタツヤに『あんたも食べる？葡萄』って言ったところくらいから」

ほとんど最初からかよ！

「あら、乱ちゃんいらっしゃい、一緒に葡萄食べる？」

「もういただいてまーす」

姉貴も気付いとらんかったんかい。

・・・・・ったく、あいつ飯まで俺ん家で食っていきやがった。俺にパフェ奢らせておいて葡萄食って飯まで食いやがった。全くなんて食い意地の張った・・・・

乱が帰った後、俺は腹の虫の居所が悪かった、俺の家で飯を食った事は別に今日が初めてと言うわけじゃない。でも限度くらいは考えられるお年頃だろ？

「ふふっ、青春ね」

姉貴の変な笑いとセリフはこの際だから無視しておこう。

「乱ちゃん、タツヤといる時とってもイキイキしてるわ」

そんなんいつものことだろう、逆に元気じゃない乱を見てみたいもんなんだがな。

「んもう、あんたって本当に鈍チンね」

・・・・・？なにがだよ

前編（後書き）

黒狐っす。もうすぐ小説書くようになって一年が過ぎようとしています、今後ともよろしゅう。

後編

そして次の日

いつもの様に屋上で弁当を食った後昼寝をしようとした瞬間、

「タツヤ！」

突然のでかい声で、俺の柔らかなまどろみは一瞬にして吹き飛んだ。何だよ乱、せっかく昼寝しようとしてたのに目が冴えちまったじゃないか。なんでいるんだよ、

「どこにいようと私の勝手でしょ！」

・・・・・あんたホントに我だな。

乱は俺の隣で弁当箱を開け、サンドイッチを食べ始めた。俺は今さっき胃袋の中に収めたばかりなので、何の気もなくそれを眺めていることにした。

「・・・・・なによ」

せっせと三角のパンを口に運ぶ乱、目を少し吊り上げてこちらを睨んできた。

「・・・・・はい」

暫くして三角の一つを俺に突き出した、俺にくれるのか？

とりあえず乱のサンドイッチの一つを受け取ったわけだが、食パンを切ってそれにレタスやらキュウリなんかを挟んだだけのようだった。これがサンドイッチだと言われればそれまでなのだが、なんか簡単すぎやしないか？

・・・・これ、お前が作ったのか？

「それが何よ」

明らかに『悪い（かコラ）』と言いたげな目線だった。俺が言いたいのは家の人は作ってくれなかったのかと言うことでだな・・・・・

「・・・・・家は、父さんと母さん仕事でいないから・・・・・」
それは先ほどとは違って、少し寂しそうな顔だった。
いやそれにしても知らなかった、
「仕事でここを出て行ったのは結構最近のことだったからムリはないけどね」
今までちょくちょく家で飯食ってたのはそのためだったのか、姉貴め知ってたな・・・
今日からでも・・・・・毎晩、俺ん家で食うか？
我ながら思いきったことを言ってしまった気がする。乱は火が付きそうなくらい顔を赤くしていた。
「ま、まぁ。アンタがそこまで言うなら、行ってあげてもいいわよ？」
・・・・・決まりだな。

そして次の日。
俺は永遠とつづく坂道を本気で恨みながら、汗をだらだらに掻きながら登っていた。
昨晩は乱が俺の家で飯を食った、俺が誘ったことを知ると姉貴がやたらニヤニヤしていたのであまり気分は良いいものではなかった。
何か俺悪い事でもしたか？
「べつにぃ～」
ええい、その変な顔をやめろ姉貴！
相も変わらず頭の中にいるんじゃないかと思うくらい、蝉の鳴き声

はやかましく響いていた。
・・・・・・ん？ありゃ乱か・・・・
霞み掛けている眼をこすると前を歩いているのは乱だった。
「よう、乱。」
何の気もなしに、ホント何の気もなしに挨拶をする、
「あ、おはよう・・・・龍也」
・・・・あれ？なんかいつもと違う。何だろ・・・・確かに挨拶を交わしたんだが何処となくそんな気がしない。
妙な感覚にとらわれ、はてと考えているうちに、乱は自分の教室に姿を消してしまった。

その日の放課後。今日一日中、朝の乱の挙動について考えていた。
別に怒っているわけじゃなさそうだ、何故なら今、隣で俺と一緒に帰っているのが乱だからだ。
怒っているのならこいつは先に帰ってしまうだろう、馬声の一つでも俺に浴びせながら。
・・・・な、なぁ。パフェでも食わないか？俺が奢るから。
いくらなんでもこの状況は居心地が悪い、とりあえず甘いものでも・・・・・
「いいよ、今金欠なんでしょ」
・・・・・・！わけがわからん。あの乱がこんなこと言うのは初めてだぞ。

そのまま沈黙を再開してしまった乱に、急にバツが悪くなってしまい、そのまま無言のまま帰宅してしまった。

家のリビングでだらしなく寛いでいると、電話で何やら話す姉貴の声が聞こえた。

会話の内容は全く分からなかったが、あまり良い事ではないようだ。

姉貴の顔がいつになくシリアスで相づちを打つ声のも元気がない気がする。

「なんの電話だったんだ？」

受話器を置く姉貴、俺の言葉にはっとしたように

「な、何でもないわよ、別に言うほどでもないわ」

・・・・？

心なしか困った顔で笑っていたように見えたが、たぶん俺の勘違いだろう。

妙な感覚が俺の中をグルグルと動き回って数日。

やっとわかったんだが・・・・・いや、実は最初からわかってたんだが、乱は俺に突っかからなくなっていたのだ。

乱と一緒に帰ることはあっても、無言のまま肩を並べて歩くのみ。

違和感はあるも、まぁ暫くすれば元に戻るだろうと高を括っていたのが間違いだった。

それは無言で歩く途中、乱がこんなことを突然切り出したことから始まる。

「ね、ねぇ龍也。後であんたの家に行ってもいい？」

乱にしては珍しく、控え目な感じに言葉を紡ぐ。普段なら勝手に入ってくんな、と言ってもいつの間にかそこにいる程だったのに、わざわざ俺に許可を求めてきた。

「え？かまわんが・・・」

俺が言い終わるのとほぼ同時、乱は急ぎ足で先に帰ってしまった。

追いかけることも出来た筈なのだが、何故かそんな気にはなれなかった。

そして俺の部屋。俺はいつもと違って、ベッドでくつろいでなどい

なかった。
代わりにベッドに座っているのは乱で、何か話そうと顔をあげるのだがすぐに俯いてしまうのを繰り返していた。
やがて決心したのか小さく息を吸い込み、
「あのね、龍也――――――――――。」
その時、乱が何を言ったのか理解するのにはかなりの時間を有した。別に聞き取れなかったわけじゃない、あまりにも唐突で衝撃的なことだったからだ。
て、転校！？
「お父さんがね・・・・仕事がっけこう落ち着いてきたから、こっちにおいでだって。あの家に私一人じゃお金の問題とかいろいろあるからこの際・・・・・って。」
そんな・・・・
「だから・・・・お別れを言いにきたの。今までありがとう、好きだった、幼馴染としてじゃなくて、男の子として」
そう言うと、乱は部屋を出て行った。
乱が部屋を出て行って、数時間が過ぎた、外は紅に染まり、昼間やかましく鳴いていた蝉の音も、クマゼミからヒグラシに交代を果たし、物悲しげな雰囲気を辺りに漂わせていた。
あいつの話では電車で行くとか言っていたな、今頃駅で電車が来るのを待っているんだろうな・・・
まったく・・・・何でいきなり・・・・・何でもっと早く言わな

いんだ。反則だろ、最後にあんなこと言うなんて・・・・・・。
部屋で取り合えずじっとしていた。本当に何もすることなんかないからだ、

「タツヤ、入るよ・・・・」
ベッドに横になっていると姉貴が入ってきた、
「・・・・・・なんだよ」
今は正直言って誰とも話したくなかった、でも姉貴は容赦なく切り出して来る
「あんた、乱ちゃんのことが好きなんでしょ？」

それを聞いた瞬間、胸の奥がちりちりと焼ける感覚に襲われた、

「ねぇ、好きなんでしょう」
俺を諭すように問うてきた・・・・わかんねぇんだ、俺がいようがいまいが、乱はかわんねぇよ。

「あんた、乱ちゃんの気持ち聞いたんでしょ？なんで答えないの、乱ちゃんは自分の気持ちに素直になったんだよ。なんであんたはそうしないの」
そんなの向こうが勝手に・・・・・・俺には関係ないだろ・・・・・・

「本当にそう思う？」

諭すような口調から苛立ちが垣間見えた、姉貴は何でそこまで言うんだ・・・・・・

「だったら、なんであんたの拳は、固く握られているの？」
・・・・・・！？、気付かなかった。自分のことなのに、俺の手は爪が食い込むほどに固く握られていた。

こんなに強く握ったら普通痛いのに、それすら今の俺にはなかった。
乱の転校は俺にとって本当に関係のないことなのか？

・・・・・・いや、ある。俺はあの乱の悲しい顔は初めて見た。いつも鬱陶しい位に元気なあいつが、
あんな顔ができるのを初めて知ったのかもしれない。
普通は女の子にあんな顔をさせるもんじゃない、でも俺はさせてしまった・・・・・・気付いてあげられなかった・・・・そんなんで何が「俺には関係ない」だ
時計を見る。電車が到着するまでもう時間がない。

行こう！

そして伝えよう！

・・・・・・俺も、おまえのことが好きだと・・・・

次の瞬間俺は部屋を飛び出していた、やるべき事は一つしかない。
すっ転んでしまうのを必死に耐えながら廊下を通りぬけた。
玄関を飛び出し駅に向かって駆け出そうとした瞬間、

「あ、龍也さん待ってください」
聞き覚えのある声に呼び止められた、声のした方向に首を傾けると
・・・・・九条！？どうしてここに。
九条は喉の奥でクツクツと笑うと
「チンタラ走って間に合うんですか？」
そう言って一方を指差す、そこにあったのは本格的・・・と言うか、どこぞの特撮で使われているような変わったデザインのドでかいバイクだった、

「学校に遅刻しちゃいそうな時にはたまに使ってるんです。さ、行きましょうか」
そう言ってヘルメットを俺に手渡す。
・・・・ま、マジでか・・・・
九条はバイクのエンジンをかける、重苦しい重低音が仄かなガソリンのにおいと共に広がった。
風を押し切る様に走り出したバイク、九条の知られざる一面だな。
まさかこんなバイクを持っていたとは。

駅に向かってかなりのスピードで走るバイク、それを運転する九条がこんなことを切り出した。
「私・・・・と言うか龍也さん以外は結構前から知ってたんです、乱さんが転校するって・・・・乱さんがね、みんなに頼んだんですよ『私がタツヤに直接言うまで内緒にしてほしい』って」

・・・・そうだったのか・・・・
「喧嘩ばっかりしている二人、見ていてとても面白かったです。夫婦喧嘩みたいで・・・・でも
急に普通の女の子になった乱さんは・・・・見ていられませんでした」

そうか、あの時俺が何か言えば事態はこんな重くはならなかったんだろうな

「今は後悔している時じゃ有りません」
・・・・そうだな、駅には間に合いそうか？
「誰に向かって口を利いているんですか？間に合いそうか、じゃなくて間に合ってあげてもいい。ですよ」
九条が悪戯っぽく笑みを浮かばせて言う。何か怖いぞ。
バイクがさらに加速する、夕暮れを支配するヒグラシの鳴き声も、

今はドスの利いた重低音でかき消された。

「到着しましたよ」
バイクから降りると、そこに待ち構えていたのは、何とゆう君だった。

「やっと来たか！」
指をポキポキ鳴らしながら言うゆう君は、素早くその丈夫そうな腕を俺の肩に回した。

「時間がねぇ！おまえをホームまでブン投げる！」
な、なに！？ちょ、ちょっとタンマ・・・・・

「目ェ食いしばれぇーーー！」

目じゃなくて歯だろ！と言うのは改札やら売店やらの上空で無様に響くだけにとどまった、つかの間の空中散歩の末、俺は駅のホームに落下する。

ベチャと言うのが一番合っている擬音語かもしれない。

「た、タツヤ！？」
目の前にいたのは、大きな赤いスポーツバックを担いだ乱だった。

「よ、よう」と情けない声が出る。乱は突然降ってきた俺に目を白黒させていた。

あ、あのさ・・・・家の事情とかあるだろうから勝手なこと言えないかもしれないけど。
今までありがとうなんて・・・・悲しいこと言うなよ。

行って欲しくない、行かないでくれ。俺はやっぱり――――――

「私のことが好き？」

なーんで先に言っちゃうかなぁ・・・そうだよ、その通りだよっ。

乱がクスクス笑っていた。

「タツヤん家、まだ残ってたわよね・・・・葡萄」

あ、ああ・・・・帰って、一緒に食うか？

――――あの時から数日後。

晴れてカップル成立となったわけだが、クラスの連中は「おめでとう」言うよりも「やっとかコノヤー」と言われ、逆に非難される羽目になってしまった。みーんな気付いていたみたいだね。

転校手続きの方も、無事取り消しができた。これはこれでひと騒動あったのだが、これは別の機会に話そう。

乱の住んでいた家も、今はもう別の住人が新たなスタートラインを切っている。

肝心の乱は・・・・・・

「遅い、早くしないと学校に遅刻しちゃうじゃないの、馬鹿タツヤ！」

わぁったよ！・・・・まぁ、俺達と一緒に暮らすことになった。

姉貴や乱の親御さんも、たがいに好き合ってるならと言うことで承諾してくれた。

日を追って、生活に必要なものが送られてくるらしい。

「そういえばさぁ」

ん？やっと『そういえば』の正しい使い方がわかったみたいだな。

まぁいいや、何だ？

「あんたの好物も葡萄だったわよね？」

・・・・・・・・ああ、そうだった。毎年自分の誕生日には大きな葡萄をみんなで食べた記憶がある。一年に一回しか葡萄を食べないと言うわけではなかったと思うのだが、その日はとても楽しみだった。
いつからやめてしまったんだろうな・・・・・・

「だったら、またやればいいじゃない」
ワザとそっぽ向いた乱が言った。
「私が・・・・祝ってあげるわよ。感謝しなさい」

――――――――――ＥＮＤ――――――――――

後編（後書き）

とりあえず、このお話はこれでおしまい。同じ名前の主人公で別の話を今考えてます。

・・・・面白かったら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4135d/

恋路、龍也の場合

2011年2月2日14時46分発行